

奈良県大和郡山市若槻町
若槻遺跡カナヤケ地区
発掘調査概要報告書

1990. 3

大和郡山市教育委員会

例 言

1. 本書は、大和郡山市若槻町280番地外で実施した若槻遺跡カナヤケ地区発掘調査の概要報告書である。
2. 調査面積・期間等は下記の通りである。

調 査 地	開発面積	調査面積	調査期間	調査原因
若槻町280外	9,199㎡	850㎡	1989.12.6 ↓ 1990.2.28	配送センター 建設工事

3. 調査は、大和郡山市長阪奥明と山本順一（大和郡山市冠山町2-62）との間で締結した埋蔵文化財発掘調査受託契約に基づき実施した。
4. 調査は下記の体制で実施した。

（調 査 主 体） 大和郡山市教育委員会 教育長 井上三夫

（調 査 事 務 局） 社会教育課 課長 保田雅史

（調 査 担 当） 社会教育課 技師 服部伊久男・山川均

（補 助 員） 御宮司和史・下大迫幹洋・荒木浩二

（作 業 員） 崎山 庄勝・岸田勝信・堀川正治・米田利男・杉山典三・市井義治
今西知之松・大極一夫・松井正一・宮村 守・堀川四郎・生島義二
古山 享・平井藤太郎・北橋 昇・藤井朝芳・藤井清治・佐谷耕治郎
青木勝義・米田郁子・奥井初代・喜多みえ子・喜多政子・城愛子

5. 調査に際しては、下記の方々の御指導・御協力を賜った。記して感謝いたします。

中井 一夫（榎原考古学研究所）

寺沢 薫（榎原考古学研究所）

寺沢 知子

吉村 公男（河合町教育委員会）

坂野平一郎（広陵古文化会）

6. 本書の執筆・編集は服部が担当した。

本文目次

Ⅰ.	はじめに.....	1
Ⅱ.	位置と環境.....	2
Ⅲ.	調査の経過と経緯.....	6
Ⅳ.	遺構の概要.....	9

I はじめに

今回の調査は、株式会社吉本工務店（取締役社長山本順一）が計画する配送センター建設工事に伴う緊急事前調査として実施した。届出書提出から調査終了に至る経過については下記の通りである。

- 1989.9.16 「埋蔵文化財発掘届出書」受理 開発者 株式会社吉本工務店
- 1989.9.21 届出書を県へ進達（副申）
- 1989.11.2 県教育長名「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」以後、調査実施に向けて具体的協議に入る。
- 1989.11.29 試掘調査に伴う事前協議（県文化財保存課・市・吉本工務店）
「試掘調査承諾書」受理
- 1989.12.4 「埋蔵文化財試掘調査委託契約」を締結する。（市・吉本工務店）
- 1989.12.7 試掘調査実施。良好な包含層を検出する。
- 1989.12.8 「埋蔵文化財の試掘調査終了について（通知）」提出 本調査の必要性を認める
終了報告書を提出
- 1989.12.11 本調査事前協議
- 1989.12.13 「本調査承諾書」受理 「埋蔵文化財発掘調査委託契約」締結

以上のように届出書が提出されてから、比較的短期間に調査に突入したわけである。調査の工程上、正月休みを含むなど、やや強行な面もあったが、県教育委員会文化財保存課、株式会社吉本工務店の御協力を得、順調に調査を実施することができた。



fig1 調査地位位置図

I 位置と環境

調査地は、大和郡山市の東部中央の水田地帯である。付近には国道24号バイパスや、市道藤町線が通り、交通量は比較的多いが、調整区域が大部分を占めるため、のどかな田園地帯となっている。とはいうものの、今後こうした幹線道路沿いの開発が進み、殺伐とした景色に変わることも間近であろう。

現在の表相地形分類によると、調査地は、佐保川流域の氾濫平野に当る。調査地の東側一帯は、緩傾斜扇状地に当る。調査地一帯は北和地域の低位部に相当するわけである。

次に周辺の遺跡について概観しておきたい。(縄文時代)横田下池遺跡^{※①③⑤}、稗田若槻遺跡^②⑫で晩期の土器片が出土している。特に稗田若槻遺跡では、幅約5m、深さ約2mの蛇行の著しい自然河道内から晩期の凸帯土器が出土しており注目される。近年県内では盆地低位部からの縄文土器の発見が目立っており、当該地一帯でも注意を要しよう。

(弥生時代)美濃庄遺跡^{③④}で、水路改修時に第I様式の壺等が採集されている。また同遺跡四反田地区^④の調査では、幅70～100cmの溝が検出され、I様式新段階の壺が出土している。いずれも今後の調査の進展に期待される地点である。治道遺跡^{③④}では、幅約3m、深さ約1.0mの後期のV字溝が検出され木製包丁が出土している。白土遺跡^{③④}では径約1m、深さ約3mを測る後期の井戸が検出されている。発志院遺跡^{②③}ではIV-V様式期の土坑が数基検出されている。稗田若槻遺跡^{②⑫}では、中期の土坑が検出されている。

その他、散布地(31・114)が数ヶ所知られている。以上のようにこの辺の弥生時代遺跡については実態がはっきり把握していないのが現実である。調査を受けた地点でも、短期間の遺構が小数量展開するのみであり、前期～後期にわたる母集落たるべき大規模な遺跡はみつかっていない。

(古墳時代)本庄杉町遺跡^⑧では、庄内期の土坑1基が検出されている。発志院遺跡^{②③}は布留式土器が多量に出土した大規模な遺跡であり、当該地の中心を成す集落である。長塚遺跡^⑤では6世紀の方形区画墓が1基検出されている。

(奈良時代)平城京(1)の成立に伴い、この地域の開拓が広く行われる。羅城門から南下する下ツ道(111)は古代の幹線道路として重要な役割を担う。下ツ道の東側約1.5kmに設けられたと考えられる中ツ道(112)も同様である。中ツ道の調査には未だ及んでいないが、下ツ道の調査は数次に及んでいる。とりわけ、下ツ道と稗田の人工河川との交点では奈良～平安時代の橋^⑩が検出され、人形、人面墨書土器、木簡など、多量の祭祀関連の遺物が出土し、平城京と係る一大祭場として理解されるに至っている。この人工河川は、幅約15mの大規模なもので、京左京九条四坊の南東辺から掘削されたもので、今もその地割をよく残している。美濃庄遺跡四反田地区^④でも、人工河道が検出され、墨書土馬や人面墨書土器が出土している。ただし、この河道は先の稗田若槻遺跡の成果から導き出された復元流路から南へ約200mズレており、新たな問題を提起した。

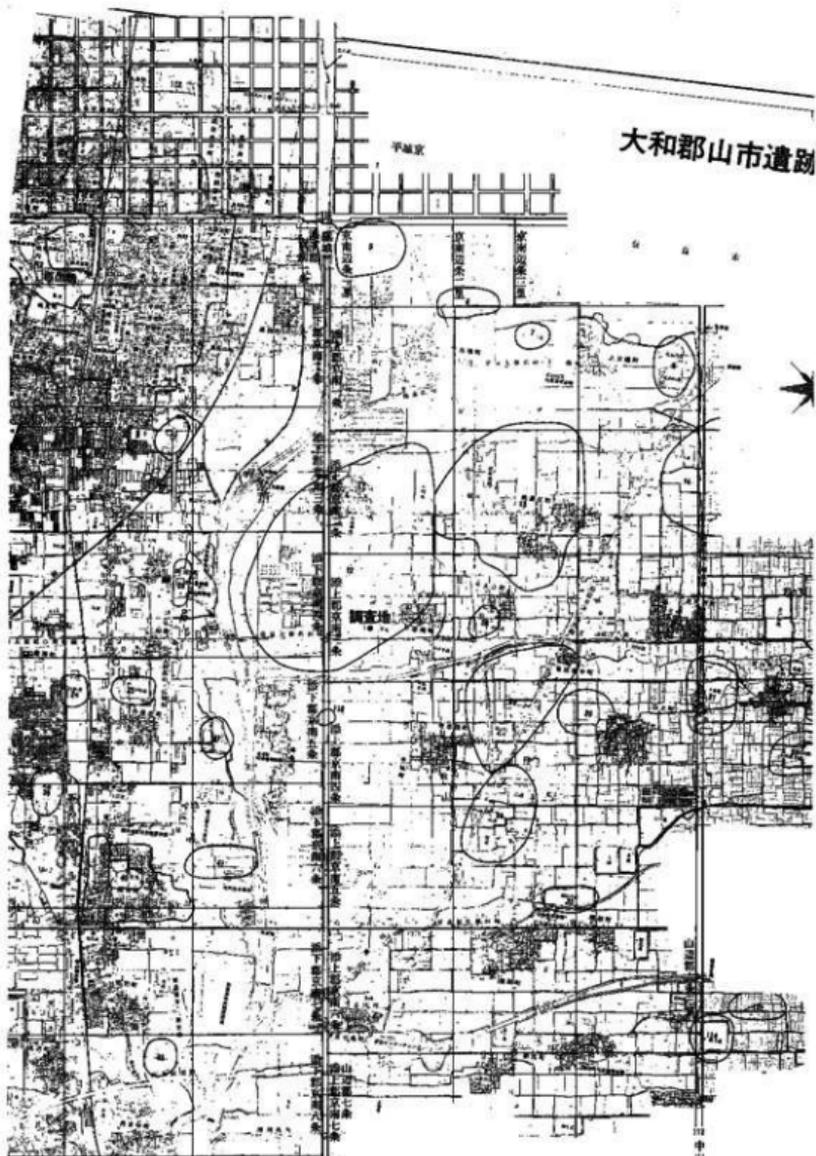


fig2. 周辺の遺跡(S-1:30000)

(中世) 多くの環濠集落が成立し、興福寺の庄園となる時代。神田、若槻、番条集落は環濠の旧観を良く留めている。中でも若槻環濠集落は、散村からの成立過程が史料的によくわかる例^⑩として学界に周知される著名な集落である。この若槻庄関連の調査では、平安期の掘立柱建物^⑪がまた、一辺約50mの濠をもつ屋敷地^⑫が検出されるなどの成果が得られている。また、若槻池の調査も実施され、池の構築技術が検討されている。^⑬ 中世末期に筒井城^⑭が完成する。筒井順慶の拠城であり、典型的平城として有名である。これまで3次に及ぶ調査が実施されている。^⑮

(近世) 郡山城⁽²⁾が築城される。当初、豊臣秀吉の異母弟である秀長が150万石で入部し、和泉、紀伊までも領有するが、徳川幕藩体制の成立、発展に従い本多、松平、水野、本多氏と藩主替えが続き、享保2年(1709)に入部した柳沢氏に至りようやく藩政も安定し、以後、幕末、維新を迎えるに至る。惣堀の構えをもつ郡山城は、城下町の発達を軸に近世大和の中心地として盛えるのである。郡山城内の調査もすでに第27次を数え、多くの成果があがっている。特に城郭中枢部よりもむしろ武家屋敷地、町人地における調査では、豊富な陶磁器類がみつかっており、今後の整理・検討が楽しみである、と思に至る今日のごころである。

以上、概観したように当該地一帯の考古学的知見はまだまだ十分なものではない。調査件数が少なく、かつ調査面積も狭いという制約があるのもその理由の一つだと思うが、基本的に佐保川の流域に広がる氾濫原、三角州性低地という地形的条件の下で、分布調査の機能が十分に発揮されていないためであろう。佐保川以東のこの地域の自然河道は、基本的に南西流することは確實で、おそらく、こうした自然河川の間に広がる微高地に多くの遺跡が立地していたであろうことを考えると、旧河道の検討が、遺跡の動態を把握する上で重要な視点となってこようか。ともあれ、今後の様々な方面の調査に期待したいと思う。

註 ① 末永雅雄「奈良県添上郡下池遺跡」(『日本考古学年報』三) 1950

② 中井一夫「若槻庄関連第4次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1982年度) 1983

③ 前園実知雄「大和郡山市美濃庄出土の弥生土器」(『青陵』No.26) 1977

④ 山川 均「美濃庄遺跡(四反田地区)発掘調査概要報告書」(『大和郡山市文化財調査概要』9) 1988

⑤ 山川 均「治道遺跡発掘調査概要報告書」(『大和郡山市文化財調査概要』18) 1990

⑥ 中井一夫「白土遺跡発掘調査報告」(『奈良県遺跡調査概報』1984年度) 1986

⑦ 藤井利章「美濃院遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書』第41冊) 1980

⑧ 中井一夫「神田遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』) 1977

⑨ 山川 均「本庄杉町遺跡発掘調査概要報告書」(『大和郡山市文化財調査概要』14) 1989

⑩ 山川 均「長塚遺跡発掘調査概要報告書」(『大和郡山市文化財調査概要』8) 1987

⑪ 中井一夫・伊藤勇輔「神田若槻遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1980年度) 1982

⑫ 註④前掲書

- ⑬ 波辺澄夫・喜多芳之『大和國若槻庄史料』(全四卷)共編1973～1976
- ⑭ 泉武『若槻遺跡第2次発掘調査概報』(『奈良県遺跡調査概報』)1983
- ⑮ 中井一夫『若槻庄関連遺跡第3次発掘調査概報』(『奈良県遺跡調査概報』1981年度)1983
- ⑯ 服部伊久男『若槻池発掘調査報告書』(『大和郡山市文化財調査概要5』)1987
- ⑰ 伊藤勇輔『筒井城跡試掘調査概報』(『奈良県遺跡調査概報』1982年度)1983



fig3. 調査風景

Ⅲ 調査の経過と経緯

調査地は、大和郡山形市若槻町280外に当る。この場所は、従来、若槻遺跡と呼ばれる周知の遺跡の範囲内にあり、小字名はカナヤケという。そこで今回の調査を、若槻遺跡カナヤケ地区の調査とする。

前章で述べたように、まず試掘調査を1989年12月6日に実施した。幅4mのトレンチをL字形に設定し、総延長75m、約300㎡を調査した。安定した褐色包含層を確認したので、試掘は包含層上面で止め、排水溝の断面で遺構面の確認を行った。その結果、厚い包含層下に黄色粘土層があり、良好な遺構面と判断されたため、事業者に本調査の必要性を説明し本調査に移行した。本調査は、試掘トレンチを生かす形で約850㎡の調査区を設定して行った。1989年12月19日、バックホにより表土除去作業を開始し、1990年2月28日の埋戻しをもって終了した。実働40日間を費した中規模の現場である。途中2月1日には大雪にみまわれ、調査区がすっかり雪没、回復に数日を要するなど、歓喜する犬をしり目に厳冬の調査はやっぱりしんどいなあという感慨を深くした次第である。

調査区の北東隅を基点に南北方面にA～Nのアルファベットを、東西方向に1～12の算用数字を付し、3×3mを一小区として遺構番号の設定、遺物の取り上げを行った。なお、南北の基準線は、都合N7°30'Wとした。また、全体の測量は、航空写真測量により、発原図を作成、出土状況図や断面図は適時発原図を併用して行った。

以下、調査日誌を掲載するので、具体的経過については参照されたい。

1989.12.6(火) 試掘調査実施、良好な包含層を確認する。

12.19(火) 本調査開始、バックホーにより表土除去作業

12.25(月) 精査開始、ベースの黄色粘土層がベトベトの状態

12.27(水) 排水溝掘り下げ、全面にシート掛け、本年の調査は本日で終了、正月休みにはいる。

1.8(月) 現場再開、遺構検出を開始する 地区割3×3を行う。

1.9(火) 中世遺構の掘り下げ開始

1.12(金) 中世の遺構、奈良時代の遺構ともに褐色土が堆積し、切り合いがわかりにくい。

一辺6mの方形周溝墓を検出する。

1.17(水) 方形周溝墓は弥生時代後期の築造と思われる。SK-03は素掘り井戸の可能性がある。

瓦器輪・軒丸瓦出土。2N区P-1より緑釉陶器が出土。

1.22(月) 5C～7C区、不整形土坑群の掘り下げ、弥生後期～庄内期變・高杯などが出土する。

1.25(木) SD-01上層掘り下げ、多量の土器が出土、弥生後期で、定形品は少なく破片ばかり

である。

- 1.30 (木) SD-01、最下層は厚い砂層、遺物は全くない。自然木、加工木が出土する。自然河道か人工河川か判断がつかない。
- 2.1(木) 大雪
- 2.5(用) 雪どけ水の排水作業、ドロドロになる。
- 2.8(木) 地上部分写真撮影
- 2.9(金) 地上部分写真撮影
- 2.16(金) 航空写真測量
- 2.20(木) 主要遺構の平面実測を行う。
- 2.22(木) 土坑群の断面断割及び土層観察アゼの除去、壁面断面の実測
- 2.27(木) 埋戻し及び資材撤去
- 2.28(木) 埋戻し終了



fig4. 調査風景



fig5. 調査区全景

IV 遺構の概要

調査地の層序は、①表土、②淡灰色土、③明灰褐色土、④灰色砂質土、⑤褐色土、⑥地山である。第5層が安定した包含層であり、その上面が中世の遺構面となる。第⑥層の地山面が、弥生～奈良・平安時代の遺構面となる。このベース面は、調査区の西へ行くほど低くなり、東端部と西端部では約30cmの比高差がある。また、包含層の第⑤層も、西端では厚さ約30cmを測るが、東端ではほとんど認められない。

検出した遺構は、弥生末～古墳時代初頭の溝、土坑約40基、方形周溝墓6基、奈良～平安時代の井戸1基、ピット2基、土坑2基、中世の素堀溝、等である。

ここでは、主な遺構である弥生～古墳時代の遺構の概要について触れておきたい。

(方形周溝墓)

総数6基を検出、全形を知り得るのは1基のみで、他は、周曲部（コーナー部）の検出にとどまる。方形周溝墓は、調査区の南東部の微高地部分に集中して造営されるようである。

ST01

唯一全形が知れる例。一辺約7.7m（周溝芯々辺）、幅約0.7m、深さ約0.1mの周溝をもつ。溝内には暗褐色土が堆積する。溝内から少量の土器が出土したのみで、原位置を保つ供献土器群などは認められなかった。

ST02

ST01の南東で検出、ST01のコーナー部と重複するが、前後関係は明確にできなかった。周溝は幅約1.2m、深さ約0.2mで、少量の土器片が出土している。

ST03

ST01の南側で検出、コーナー部分のみが残る。ST01と前後関係にあるのは確実であるが、周溝がかろうじて残る状況であるので、断定はできない。少量の土器片が出土した。

ST04

幅約1.2m、深さ約0.2mの周溝をもつ。

ST05

ST04の一辺と併行して（位置が）造られている。幅1.5m、深さ約0.3mの周溝をもつ。今回検出した周溝壕の中では、その周溝の遺存状態が最も良好であり、断面は梯形を成す。

ST06

調査区の南端で検出、中世の井戸SE01、ピットに切られ、ごく一部分を検出したにとどまる。

(土坑)

約40基を検出。平面形態はさまざまで、凹形、不整形、楕円形等であるが、長軸約1mの楕円形をなすものが多い。堆積土は、暗灰褐色土が主体であり、自然堆積した状態のもの、人為的

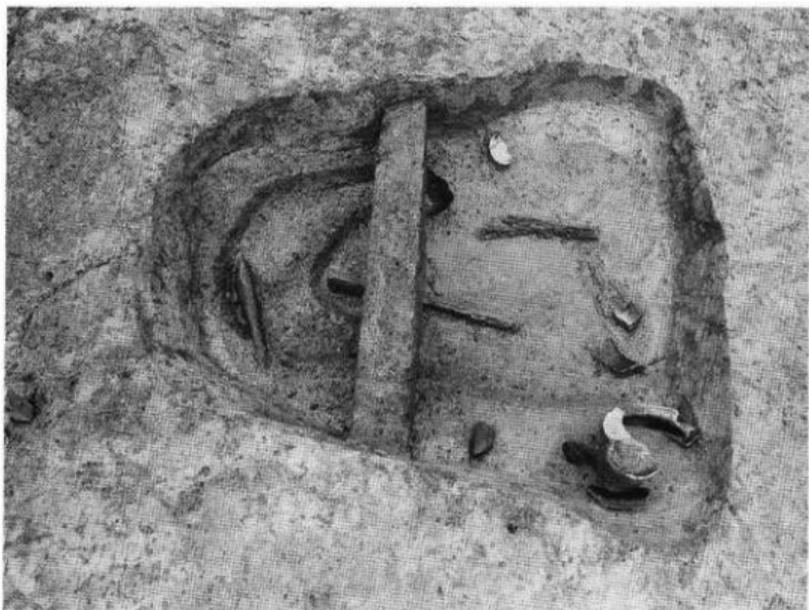


fig6. SK-01



fig7. SK-01細景

fig8. P-1

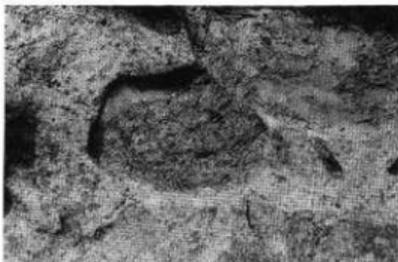




fig9. 全景(西から)



fig10. 土坑群(南東から)

に埋戻した状態のものがある。出土遺物は少ないが、土師器の甕を入れるものが多い（SK-08、16、19、22、29、35、38等）。ただし、甕にも大形のもの和小形のものがある。SK07には高杯杯部、SK18では二重口縁壺（S字形）の口縁部が入れられていた。土器は庄内式に収まるものであろう。土坑群は後述するSD01にそって形成されているようであり、大きく二つの群に分けることができると思われる。

SD01

調査区の北西隅で検出した幅約5m、深さ約0.8mの溝。自然河道と思われるが、環濠の可能性もある。溝内には厚い灰砂層が堆積しており、自然木、加工木、桃核等が出土したのみで、土器は一点も出土していない。このSD01の最終堆積層は厚さ約20cmの明茶褐色土層であり、この層に多量の土器が含まれていた。弥生終末期のものであり、庄内式までは降らないようである。

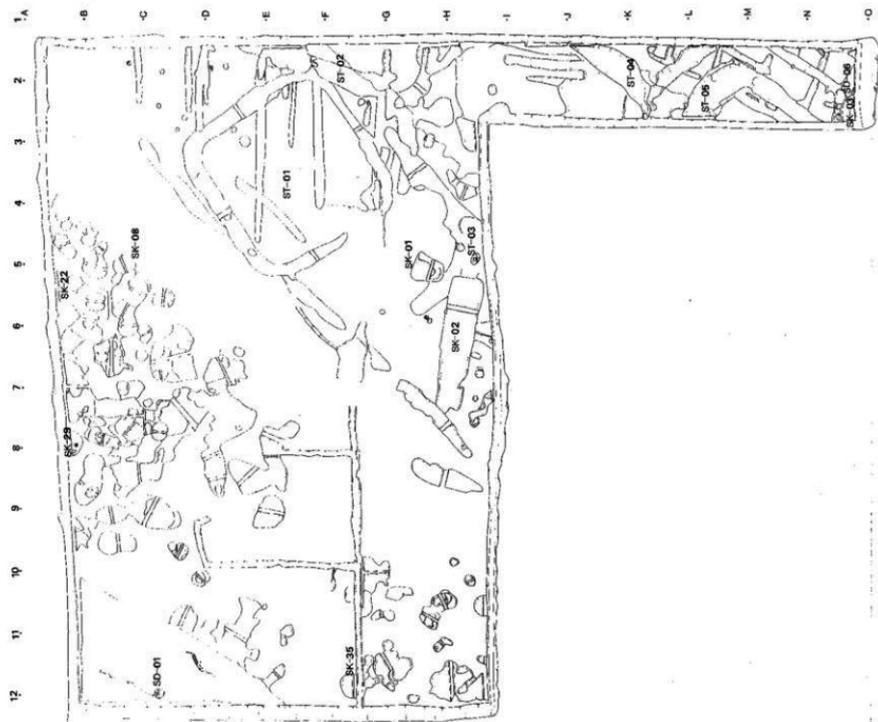


fig11. 遺構平面図(S-1:200)



fig12. 土坑群(西から)



fig13. SK-22



fig14. SK-08



fig15. SK-29



fig16. SK-35



fig17. SD-01

大和郡山市文化財調査概要 16

若槻遺跡カナヤケ地区

発掘調査概要報告書

平成2年3月30日 印刷

平成2年3月31日 発行

編集 大和郡山市教育委員会

大和郡山市北郡山町248

印刷 PR美術印刷株式会社

大和郡山市茶町44
